私の読史余論

進化系統研究部門進化形態分野・毛利俊雄

『読史余論』は新井白石が正徳二年（1712）、将軍徳川家宣に講義したときの草稿である。この文では、筆者の言語生活の変遷を同書の「本朝天下の大勢、九変して武家の代となり、武家の代また五変して当代におよぶ、、、」にならって略述する。

発端は昭和二十五年（1950）、広島県尾道市長江町（旧町名は十四日町）に生まれたことにある。一変は、5 歳で尾道幼稚園に入園したことである。二変は長江小学校への入学である。ここまでは、なにぶん幼稚、幼少の時期であり具体的な記憶はさだかではない。一変がたしかにあったと推測するのは、5 歳まで私は狭い生家にこもりがちで、幼稚園ではじめて家庭の外の言語に接したはずだからだ。二変は小学校が義務教育であることから、容易におしはかれる。要するに小学校は、母集団が幼稚園よりひろいのである。いずれにせよ、ここまでは尾道語の世界。

中学校はとなり町の三原市に通った。これが三変。隣接する市でも、三原の言葉は尾道人には新鮮であった。四変は福山市の高校に通ったことによる。もともと、尾道と福山のことばがわずかにことなるうえに、進学校のせいか、ここでは岡山県西部のネイティヴの言語にもすこしさらされた。

五変は京都大学入学である。これは、京大生のことばの激変期とも一致するのでややくわしくのべる。先輩たちはやや硬いほうへくずれた関西弁をつかっていたようにおもう。西日本中心のおおむねは田舎者の混成集団がこういう言語で折り合いをつけるのはしかたのないことであったろう。ところが、昭和四十四年（1969）年の入学者は、東京大学の入試がおこなわれなかったこともあり、東日本、おもに関東の高校や予備校でゴロついていた者がかなりの比率をしめた。混成集団で、どの程度の比率を占める者の言語が大勢になるのかはおもしろい課題だ。マスコミの影響もあったのであろうが、京大生日本語は、ここで、相変わらずのくずれは払拭できてはいなかったものの、関西語にちかいものから標準語にちかいものに大きく変わったのである。その後の京大生語については、つまびらかには知らない。ところで、私以前の京大生語の話者はまだ一部に生存している。なにせ、ヒトの寿命はながいのだから。

六変以降は、小規模なので、省略する。

みずからの言語生活の変化をかえりみると、自分の言語を恥じ、ひたすら周りにあわせようとしてきたこと、見苦しいとおもわないでもないが、それはそれで努力賞ぐらいはあげてもいいかなともおもう。

アクセントには懐かしい尾道語の名残があることを付記する。